



Title	『都の花』における＜閨秀小説＞：女性作家と雑誌メディア
Author(s)	屋木, 瑞穂
Citation	阪大近代文学研究. 2003, 1, p. 11-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92614
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『都の花』における〈閨秀小説〉

—女性作家と雑誌メディア

屋木 瑞穂

序文

商業ジャーナリズムとして「小説雑誌の魁と呼ばれる都の花」(年頭の口上『都の花』第七四号、明二五・一・三)は、明治二十一年一月二日に金港堂から創刊された。その約四ヶ月前の同年六月には、田辺花圃が、坪内逍遙の「当世書生気質」に倣って鹿鳴館時代の女学生風俗を描いた『藪の鶯』が金港堂から刊行されている。東京高等女学校に籍を置いていた一九歳の女学生が書いたということも相俟って、多数の新聞・雑誌がこぞ取り上げて評価し、版を重ねたことは周知の通りである。女性の筆になる小説の単行本は、前年に女学雑誌社から出版された中島湘煙の翻案小説「善悪の岐」に続いて二例目、これ以後一つの突破口が開かれたように女性作家が相次いで現れた。石橋忍月が、「閨秀小説家の答を読む」(明二三・四・一三『国民之友』)のなかで、『女学雑誌』(第二〇五〜二〇九号、明二三・三〜四)に掲載された「小金井きみ女史」「曙女史木村栄子」

「若松しづ子」「竹柏園女史」「田辺龍子」の五人の女性作家による「閨秀小説家答」集を批評した際、「藪の鶯は女文人をして奮起せしめ、遂に今日あるに足らしめたる其源」であると述べているように、『藪の鶯』出版の成功は、〈閨秀の時代〉の幕開けを告げることになった。そこで改めて留意したいのは、そうしたジャーナリズムの機運を引き起こしたのが、近代日本最初の商業出版の文芸雑誌『都の花』を創刊した金港堂であったという点である。

メディア勃興期としての明治二〇年代、新聞・雑誌は、女性の読み書き能力を拡大すると同時に、小説の読み手から書き手への道を切り拓いていったことは、すでに指摘がある通りである¹⁾。本稿では、明治二〇年代前期の〈閨秀作家〉誕生の時代のなかで、『都の花』というメディアが果たした役割について考察したい。

一 『都の花』における女性作家の登場

明治三十二年三月一六日、『女学雑誌』第一五三号には「女流小説家の本色」と題した次のような社説が掲げられている。

湘煙女史（中島俊子）先づ「善悪之岐」を著はし、花圃女史（田辺龍子）次に「藪の鶯」を著はし、秋月女史（大島千代子）都の花に於て「許嫁の縁」を作り、曙女史（岡本栄子）読売新聞に於て「婦女の鑑」を編み、竹柏園女史（佐々木昌子）亦た都の花に於て「胸の思」を綴り、湘煙女史再び「山間の名花」を同じく都の花に掲げたり。其他草稿既に脱落して將に飛揚翱翔せんとするものには、佐々木光子の「赤子の一心」「松の歎息」「果敢なき埋火」等あり、正に草稿中にして追て成んとする者亦尠らず、現に腹案中にして今や煩悶として將に産れんとする者亦更に尠ならず、恋々として先輩を慕ひ先被布を着て早く小説家たらんずる女学生特に多し

右の記事にあるように、明治二十二年半ばまで、「女流小説家」はわずかに湘煙女史と花圃女史の二人を数えるのみであつた。しかし、同年一月に発行された『都の花』第二号に秋月女史の「許嫁の縁」が登場して以降、同誌上には陸續として「女流の著作現はるゝ」という状況が生まれていた。その先頭を切つた「許嫁の縁」（二五号、明二一・一一・四一―一二・一六）は、「压制結婚」の題材を扱つた小説である。「女学校を卒業」した主人公村上園子が、父に許

嫁の従兄精一の上京を告げられたことを発端とする物語である。「今の教育を身に受けて、善良なる婚姻法、夫を選ぶの必要」を知る園子は、「自由の力を失ひ、鉄の鎖につながれ」たように感じる。精一の親友桂木芳男が逗留するうち、園子は芳男に恋心を抱く。芳男に「我思ひ」を告げられ、園子の「心の本城は、あはや落ち」そうになるが、「我身の守るは父の命」と拒絶する。作中では、「压制結婚」は「今の世に行ひ得べき事にあらず」と父を批判する妹と、「女大・庭訓」を盾に取つて「今の女子の様」を非難する「古風の厳格なる」伯母が配置され、新旧対立の構図が描かれる。結末では、園子の真意を確かめるために芳男に成り済ましていたことを精一に明かされ、「心にて慕ふ芳男も、義理にて従ふ精一も、同じ人」だと知つた園子は、晴れて精一と結ばれる。続く竹柏園女史の「胸のおもひ」（六八号、明二二・一・六―二・三）では、「若き歌人」として名の知れた「文学士」の梅園秀雄が、和歌の素養があつて「温良い上に学問もでき」る露子と、「英学」に堪能で「西洋風の交際」に長けた「活発」な男爵令嬢の種子という対照的な女性の間で揺れ動く姿が描かれている。末尾では、秀雄が「種子嬢を思つたのは美はしく愛嬌のある容貌に一時迷つた」だけで「真正の愛情でなかつた」と悟り、女徳を備えた露子への「愛」を再認識して結婚する。次いで掲載された湘煙女史の「山間の名花」（九一―一二・一五号、明二二・二・一七―五・一九）は、「夫婦間の眞の愛」が「全編の眼

目」という山田美妙の同時代評（明二二・六・一五『以良都女』二四号）があるように、政治家高園乾一と妻芳子の「精神の親しき交り」が描かれている。芳子は「嘗て我國の婦人が憐れな地に立て居る」のを見て「救ひた」と願い「東西に奔走」する「女丈夫」であったが、結婚後は「女が固有の和かき愛」で夫の「志を奮起」させる内助の功を発揮し、女権運動に奮闘する「女弟子」に対して「婦人の徳に恥ない奥優かしき挙動を望む」と諭す。

以上の作品に続けて、巖本は先に引用した社説の中ですでに脱稿された作品として「赤子の一心」（孝子の一心）の誤植）及び「松の歎息」を挙げている。しかし、これらは『都の花』二四号（明二二・一〇・六）、七四号（明二五・一・三）に竹柏園女史の筆名で掲載される予定の作品である。なぜ巖本が未発表作品の存在を知り得たかは定かではないが、『都の花』の編集部ですでに原稿が寄せられ、女性作家の積極的な起用の青写真があつた可能性を示唆している。

『都の花』の創刊以前、『女学雑誌』一一五号（明二一・六・二三）の新報欄に掲載された「女の雑誌彌よ盛んならんとす」と題する記事は、「金港堂より発兌する『都の花』の「趣向」について、「ラルガン、ピアノの上に載せても相応する風に立派にして交際社会の玉手箱流行社会のお手本たらんとすとか云へり吾人之を占ふに蓋し『いらつめ』を更らに通にしたるもの」と述べている。また同記事と並ん

で「之れと文学の発達（同右）」という一文があり、「女の教育が盛んに成り女の雑誌が世に出でたる時代より文学の形勢一変したり而して彼のイラツメの如き亦未来の都の花の如きは此の一点に向ふて最も効能多きものならん」と述べている。

周知のように明治二〇年前後、女性啓蒙の運動の渦中から婦人雑誌が次々と創刊され、新しい女性読者を掘り起こしていった²²。婦人雑誌ジャーナリズムの興隆は、新世代の女性たちに文筆活動の機会を増やし、読み手から寄稿者への通路を開拓していくことになった。留意したいのは『都の花』がまさにそうした出版状況のなかに誕生したということである。明治二〇年七月に成美社から創刊された婦人雑誌『以良都女』の編集主筆として活躍していた美妙を『都の花』の主幹として抜擢したことは宣伝的機能を果たし、婦人雑誌が開拓した女性読者層をも抱え込んでいく新時代にふさわしい文芸雑誌としての色彩を発揮することが期待されていたと考えられる。表紙が雑誌のイメージを作る役目を果たすことはいうまでもないが、『都の花』の色刷りで桜の花弁が描かれた表紙絵は、いかにも「此書の名におへる、都の花の色競べ」という創刊の辞にふさわしい華麗さを印象づけるものであった。『我楽多文庫』一一号（明二一・一一）の「街談巷説」欄に載つた「是は近頃大評判の雑誌」という記事では、『都の花』の外形的体裁が視覚的に与えるイメージについて、「表紙は優にやさしく令嬢必読とい

ふ可き体裁なり」と評しており、女性読者も対象に想定された雑誌として受け止められたことがわかる。

(1)『都の花』における〈閨秀小説〉の掲載状況

『都の花』は、先述したように明治二十年一〇月に創刊され、明治二十六年六月一八日に第一〇九号で廃刊となった。約四年八ヶ月の活動期間中に、同誌に掲載された女性の筆になる全作品の一覧を挙げると次のようになる。

- ① 秋月女史「許嫁の縁」(二二五号、明二二・一一・四〇
一二・一六)
- ② 竹柏園女史「胸のおもひ」(六八号、明二二・一・六
二・三)
- ③ 湘煙女史「山間の名花」(九二、一五号、明二二・
二・一七五・一九)
- ④ 竹柏園女史「姉妹」(二九号、明二二・七・二二)
- ⑤ 椰園女史「孝子の一心」(二四号、明二二・一〇・六)
- ⑥ 花圃女史「八重桜」(三六三三九号、明二三・四・六
五・一八)
- ⑦ 藍江女史「うたゝね」(四六四四八号、明二三・九・七
一〇・五)
- ⑧ すみれ女史「半開の梅」(五五号、明二四・一・一八)
- ⑨ 竹柏園女史「松の嘆息」(七四号付録、明二五・一・三)
- ⑩ すみれ女史「有馬筆」(七四号付録、明二五・一・三)

- ⑪ 花圃女史「こぞのつみ」(八八号、明二五・八・七)
- ⑫ 秋香女史「二人佳人」(九一四四号、明二五・九・一
八・一六)

- ⑬ 一葉女史「うもれ木」(九五九七号、明二五・一一・
二〇二二・一八)

- ⑭ 一葉女史「暁月夜」(二〇一、明二六・二・一九)

- ⑮ 花圃女史「片うづら」(二〇三、明二六・三・一九)
- 右にみられるように、創刊時の第二号(明二二・一一・四)から第二二号(明二二・四・七)までは毎号のように続けて女性の書いた小説を掲載しており、女性作家に積極的に門戸を開こうとする編集態度が明確に伝わってくる。同時期女性作家出現を待望するジャーナリズムの要請を敏感に察知して、高田早苗主筆のもとに「文学新聞」(『半峰昔ばなし』所収、「六四、文学新聞としての成功」)の色彩を濃くしていた『読売新聞』でも、明治二十一年一月八日から二二日にかけて「葦屋よし女」という女性作家の筆名で小説「夜の錦」が紙面を飾ったのを皮切りに、翌二年には曙女史作の「婦女の鑑」(一・三二・二八)、「操くらべ」(二〇・六二・一〇・八)が連載され、女性作家の登用に前向きに取り組む姿勢がみられた。一三年には清花女史「娘氣」(二・二二・一七)、曙女史「わか松」(二・三二・二〇)、花圃女史「教草おだまき物語」(四・一四・四・一九)、三茂女史「花競上野四季咲」(七・九・八・八)等の作品が相次いで掲載されてピークに達するが、しかし同

年七月以降、紅葉と露伴の競作を同時に発表するという企画が始まった時期をさかいに女性作家の小説は紙面から姿を消していく。

一方『都の花』の場合は、単にブームに載った一時的な現象にとどまらず、概して女性作家の起用に意欲的な編集態度は廃刊にいたるまで継続していたということが看取できる。ただ見過ごせないのは、明治二十四年一月一八日発行の五五号から翌年一月三日発行の七四号までの約一年の空白期である。この空白の大きな要因の一つとして考えられるのは、明治二十四年五月一七日発行の六三号に掲載された山田美妙の「大恥辱」(第六、七)と藤本藤蔭の「やぶだゝみ(其四淫婆)」が風俗壊乱するものとされて六月から七月にかけて発行停止処分をうけたことである。明治二十三年一〇月の教育勅語の發布後、国粹主義的風潮と相俟って(女徳)論が声高になつてゆくなかで、風俗壊乱を理由に停止処分をうけた雑誌に小説を掲載することは女徳に瑕をつけるに等しい行為として、女性作家の作品の掲載を差し控えたのではないかということが推測される。年が改まつて翌二五年一月三日発行の『都の花』七四号の巻頭では、「発行兼編者人」の中根淑が「年頭の口上」を掲げ、「小説雑誌の魁と呼ばれる都の花も、折折世のなかを警醒する位な事を載せるがよい」と「娼妓買出し人の奸策、海外醜業者の、渡航免状を二重に遣ふ手段などを穿くり出し」て「風俗矯正の万分之一にもならうかと、やり掛つたが最後の助、何

ぞ思はん反対に風俗を壊乱すとの御叱り」を受けるに至つたと弁明している。またこの新年号の付録欄では、二篇の女性作家の小説の起用をセールのポイントとして誌面づくりをし、イメージの一新を図っている。後述するように『都の花』では、女性作家を起用したさまざまな編集上の企画を立てており、女性作家という存在にいち早く門戸を開き活躍の舞台を提供したことは、この雑誌の際立った特徴の一つとして注目に値する。そこで次に、同時期に刊行された小説中心の文芸雑誌の中に占める『閨秀小説』の比重と比べることによつて、そうした『都の花』の性格をより明白に浮き彫りにしてゆきたい。

(2) 同時期の『小説雑誌』との比較

当時の『小説雑誌』としては、『都の花』創刊に先立つこと五ヶ月の明治二十一年五月に公に売り出され始めた硯友社の機関雑誌『我楽多文庫』(一〇一六号、明二一・五〇二二・二)が第一に挙げられる。明治二十一年一月一〇日発行の『我楽多文庫』第一一号に掲載された紅葉山人口述・漁村柳筆記「紅子戯語」巻之二には、「硯友社に集ひたる編集の面々」の「雑談」を「書写し」た次のような戯文調の一文が掲載されている。

九《時に美妙子「都の花」でしつかり蔵入がありましたたらう 二号にはまた秋月女史と同席なぞは稗官冥

加に叶ったといふもんだ」

思《アノ秋月女史といふ名で売れが余ツ程違ふさうだ、
なんといつても浮世は色カ》

九《社でも一二枚面のいゝ処を配剤したらどうだ》

美《文章だけを見せるのですから面のいゝのは錦衣夜
行です》

思《だから著者の写真を巻頭へ出したらよからう》

右の会話にみられる「秋月女史」とは、明治二十一年一
月四日発行『都の花』第二号に初登場した女性作家の筆名
である。硯友社の編集人たちは、女性作家起用に踏み切つ
た『都の花』の編集態度に関心を寄せ、その背景に出版社
の商業戦略を見ている。興味深いのは、『都の花』に対抗し
て女性作家の「写真を巻頭へ」掲げてはどうかという提案
がみられる点である。ここで想起されるのは、明治二八年
一二月、博文館から『文芸倶楽部』臨時増刊として発行さ
れた「閨秀小説」特集号の巻頭を飾った肖像写真である。

しかし、このように女性作家の誌面参加に関心を示す一方
で、男性社員で占められた硯友社の機関誌が女性の書き手
に積極的に門戸を開いたわけではない。硯友社機関誌の中
では、『我楽多文庫』第三号（明二一・六・二五）の「千紫
万紅」という戯文新体詩欄に菱花女史の新体詩「蝶」が初
めて誌面に彩りを添えた後、同女史の新体詩「金風、朔風」
（同一号、明二一・一一・一〇）、また『我楽多文庫』の
継続誌として第一七号を初号として発刊された『文庫』一

七号（明二二・三・一一）に「月」、同一九号（明二二・四
・一五）に「三水岳」等の新体詩が掲載されたが、女性執
筆者の比重は極めて小さい。さらにこれ以降硯友社系機関
誌として『小文学』一〇九号（明二二・一一・三三・四）、
『江戸むらさき』一〇二号（明二三・六・三三・一二）、
『千紫万紅』一〇八号（明二四・六・二五・三）、『小桜絨』
一〇五号（明二五・一一・二六・七）等が刊行されたが、
女性作家の作品は出現していない。

明治二十三年一月五日発行の『都の花』新年号に掲載され
た「年頭の口上」において、「昨年の十月此雑誌を目論見
始めた頃はまだ世に小説雑誌の影法師も見えざりしが、夫
れから一雨くく殖え出して来て……小説大流行の時節と
なった」と述べているように、明治二十一年一〇月の『都の
花』発刊以来、小説雑誌の創刊が相次いだ。明治二十一年一
一月には『小説萃錦』、次いで二月には『やまと錦』が創
刊されている。春陽堂から出た『小説萃錦』（一〇一五号、
明二一・一一・二二・六）は、「新聞紙に掲げたる小説のう
ちより、善きものをのみ撰みて、作家の訂補を請ひて」（『小
説萃錦発行の主旨』）掲載した雑誌である。当時の『国民之
友』（三四号、明二一・一一）に掲載された広告によれば、
「寄書家人名」として吉田韜庵（朝野新聞）、前田香雪（絵
入朝野新聞）、宮崎三味（東京電報）、条野探菊（やまと新
聞）、塚原夢洲（東京日々）、饗庭篁村（読売）、森田思軒（報
知）、須藤南翠（改進）の各新聞記者が挙げられているが、

旧作小説の再録という編集方式をとったこともあり、女性作家の筆になる作品は見られない。尚、春陽堂は明治二十一年一月、新作を標榜した『新小説（第一期）』（明二二・一〇二・三・六、一〇二八号）を創刊しているが、女性作家の小説は誌面に登場していない。一方博文館から発行された『やまと錦』では、早くも第二号から幽芳女史著述・南翠外史刪潤「未開紅」（同誌二〇三、五〇六、八、一〇、一三、一五号、明二二・二・一〇九・一）の連載が開始された。ただしこの作品に関しては、冒頭に掲げられた「小序」で須藤南翠が作者の「幽芳女史は心をかしき淑女」であると強調しているにも関わらず、男性の筆者が書いたものであるという指摘がある³³。その信憑性如何はひとまず置くとしても、「女史」の筆名を冠した小説の掲載に踏み切った背景に、對抗誌『都の花』への競争意識が働いていたことは容易に推察される。例えば、次いで掲載された小金井喜美子訳「星」（四号、明二二・三・三）は、同年二月に同社が発行した『日本之女学』にすでに発表されたものである。何故このような二重掲載のミスをしたのかは不明だが、雑誌の体裁上女性作家の作品を次々と掲げる必要に駆られていたことが伺える。尚、同誌上には小金井喜美子訳「黒き玉」（同誌五号、明二二・四・一）、竹柏園女史「野辺の堇」上・下の巻（同誌九、一二〇・一三、一三二、一三八・一〇二・一一）が掲げられたが、明治二十二年一月に一三号をもって廃刊を迎えている。

以上のように同時期の他の小説中心の文芸雑誌と比べると、女性作家起用の先鞭をつけたことが、『都の花』の顕著な特徴の一つとしてより鮮明に浮かび上がってくる。また明治二〇年代前半期において、『以良都女』³⁴や『女学雑誌』などの婦人雑誌を例外にすれば、『都の花』は女性作家に誌面を開いた数少ない小説発表機関誌としての役割を果たしていくことになる。『江戸紫』第一〇号（明二三・一・五）に「作者類聚名彙」という当時の文士の筆名の一覧表が載っているが、「女史」の欄に連ねられた「曙（故）、竹柏園、花園、秋月、藍江、湘煙」の六人の女性作家名の内の五人までが『都の花』の寄稿者であった点からも、このことは一層明瞭である。

二 小説に描かれた〈娘作者〉

明治二〇年代前期、雨後の筍のように現れた「妙齡闊秀」作家たちは好奇の視線を集め、聊かの揶揄・嘲笑をこめて「娘作者」という呼称で表されていた。小説に手を染めた女性たちは毀誉褒貶の的となり、『都の花』に出現した女性小説家も、同時代作品の中に素材として取り込まれていた。例えば、明治二十二年一月から二月にかけて活版公売本『我楽多文庫』第一五〇六号に掲載された笑雪女史・拜枝女史合作「自惚娘作者」は、駆け出しの「娘作者」の笑雪・拜枝両女史が、言文一致・雅俗折衷両文体の優劣を賢しらに

討論する様を戯画的に描いた小説である。その会話文中に、言文一致を採用した新作小説を『文庫の花』に発表する笑雪女史が、原稿料の儲けで「ボンネットが出来ますネ」と拜枝女史に揶揄される箇所があるが、『文庫の花』というのは明らかに『都の花』を振った言葉である。この作品が、『都の花』に現れた女性小説家を強く意識したところに成り立ったものであることは、「言文一致はなんだか下卑て居て、どうも高尚と云ふわけにいかない」から「雅文調」を採用するという拜枝女史に対して、笑雪女史が「秋月女史の様な、『いざさせ給へ』の方が好きなんですネ」と言うように『都の花』初登場の女性作家名が露骨に出てくる点からも明瞭である。末尾では、「諷誠娘作者」という外題で「片腹痛きは一雨毎に芽をふきだす此頃の娘作者ぞかし」と「女史共の悪口」を書いた手帳を拾った両女史が、持ち主の「漣山人」に梅の枝で打ちかかるという女性らしくない振る舞いを戯画化している。この後、著者の漣山人は「黒衣魔」(明二三・三『日本之文華』第四五号)と題する作品の中でも、「娘作者」を諷している。「鞍馬山人」と称する主人公の男性作家は、弟子志望の「駆け出しの作者」と「今日の文学社会」について議論する中で、次のように女学生の間で小説家志望が急増している状況を語っている。

不思議なのは娘作者だ、婦人の作者だ。何時か誰やらが、婦女子は小説家に適して居ると云ふことを云った、その結果でもあるまいが、追々婦人の作者が殖える様

子だ。此の間も新聞で見たが、ある女学校の女生徒の中には、五六人組んで小説の雑誌をこしらへて居るとか、小説研究会を開いて居るとか、折々聞き込む……。右の現象に対して、「鞍馬山人」は「其等の令嬢諸君が、全く他日東洋のエリオットを以て自ら任じやうと云ふ氣」ならば「嬉しくも亦有り難い」が、「お慰みに書いて居る」のなら「今の中に止てもらい度い」と厳しく非難している。

また『都の花』誌上にも、「娘作者」を諷刺した作品が発表されている。内田不知庵「当世文学通」(『都の花』一七号、明二二・六・一六)は、「批評紳士」と「売り出しの娘作者野暮女史」とが小説談義する所へ、「鈴の屋」という言文一致作家が闖入してきて「意味ありげに女史を視る」といった筋立てで、「女史」の名を冠した作品の裏幕に女性文体を擬装した男性作家が存在するという「代作」問題を扱った諷刺小説である。「野暮女史」は「批評紳士」との対話の中で、「此頃の『れでエのオベリす』と。ね、妾も其一人ですが、想像力のないにも憫れるわ、菌苔園女史の「船のもやひ」、あれが喝采を得たんですから、ほんとに世間は眼がなくつてね」(傍線筆者)とライバルの女性作家を誹謗しているが、傍線部は明らかに『都の花』六八号(明二二・一・六二・三)に発表された竹柏園女史の「胸のおもひ」の振りである。作者の不知庵は、『女学雑誌』一五一号(明二二・三・二)に掲げた批評の中で「ブルユーストツキングは將に日本に頭はれんとす」と述べ、『都の花』に登

場した「竹柏園女史の新作」を取り上げ、「女性の中に超出したれども若し遠慮会釈なく云へば是といふ脚色もなく殊に女性の特質ともいふべき長所―即ち人情を穿つにも亦疎なるが如し」と辛口の批評をしている。「当世文学通」は、「珍しき娘作者」と持て囃されて過大な評価を得る女性作家を皮肉な調子で揶揄し、戯画化している。「鈴の屋」は、「批評紳士」の好評を得るために、「野暮女史」の新作『冬の筍』の「結婚を団円」にした「結末は斬新」だと称揚するが、ここでは暗に女性作家の多くが用いる陳腐な趣向が揶揄されている。「鈴の屋」が、『冬の筍』。あれはきつと当りますよ、僕は余程苦心したからね」と言つて「女史の小指を握」る場面は、野暮女史が色仕掛けで代作を依頼したことを暗示し、『冬の筍』は代作なり』と噂が世間に立ったという結末になっている。

また女性が小説を書くこと、読むことを題材にした作品としては、熱狂的な「小説好き」の娘を主人公とした秋城居士作「小説娘」（明二四・九く一〇『都の花』第六七く六九号）がある。「書林娘屋」の看板娘文子は、「婿選定の小説試験」のために、「妾の意に適する小説をものされたる方を以て夫婦と定め必ず結婚致すべく候ふ」という小説募集の新聞広告を掲載する。文子は、「小説を拵へ」る女性である。新聞広告は社会の関心の的となり、「東洋諸国を巡遊」する「独逸国の文学博士」が「川津田文子の広告と云ふ演題」で、「文学上の美術なる、小説を以て試験の器械に活用

せしが如き、其思想の風流にして優美なる、其才智の慧敏なる、其方法の高尚なる、全世界中第一等の淑女史」と称え、「日本帝国の文運旺盛にして、已に開明の域に達した」と賞賛する。「小説熱」は「女子にも頓て感染して、女学校の生徒などは、寄ると障ると、文子の噂さや小説の品評」し、小説市場が活況を呈する様相が戯画化されている。このように、小説市場に参入し始めた女性たちは、読者の好奇心をそそる題材として小説に取り込まれ、軽視しがたい勢いをもって文芸ジャーナリズムの一角を占めつつあったのである。

三 『閨秀六家撰』の出版

明治二四年一二月、金港堂は『都の花』に掲載された閨秀小説をアンソロジーとして企画し、出版（七五号の巻末には、広告を掲載）した。その「目録」を示すと次のようになる。

女記者	伊予	花園女史
胸のおもひ	東京	竹柏園女史
半開の梅	西京	すみれ女史
うたゝね	美濃	藍江女史
孝子の一心	東京	柳園女史
許嫁の縁	札幌	秋月女史

この書物は、明治二一年一〇月創刊から明治二四年まで

の間に『都の花』誌上に掲載された女性作家作品の中から五篇を選び、巻頭小説として未発表の「女記者」を追加収録して全六篇の『閨秀六家撰』に編んで刊行したものである。『都の花』三六～三九号（明二三・四・六～五・一八）に掲載された花圃の「八重桜」は、零落した一家の命運を双肩に担った女主人公が、奉公先の令嬢の許嫁への恋を断念して貴族の妾となり一子を生むという物語であるが、この作品は好評を博し単行本『さゝなみ』に美妙の「花車」と並んで収録され、早くも明治二四年八月には第二版が出るといって売れ行きであった。ところで、国立国会図書館所蔵『明治期刊行図書目録』第四卷（文学語学）に目を通してみると、『閨秀六家撰』以前には女性作家の小説ばかりで編集された出版物は出現していない。明治二〇年代後半になれば、閨秀小説を特集して世人の視聴を集めた明治二八年一二月発行の『文芸倶楽部』臨時増刊号のような例があるが、『閨秀六家撰』は明治の出版界における最初の女性作家の小説集という意味において、画期的な企画であったといえる。

表紙絵の意匠は、【図1】のようにクリーム色の地に張られた宣伝広告紙の右上に「閨秀六家撰」という題字が書かれ、左下の長方形の枠の中に女性像が描かれている。妙齢の女性を表徴する島田髷のバリエーションの他、紅薔薇の簪を挿した束髪、鼠色の頭巾など六種類の女性の髪をデザインし、六人の多彩な女性作家をイメージさせている。

【図1】



右下には発行兼編集人の中根淑の署名「迷花」という文字が書かれた缺が描かれている。浮世絵の一ジャンル（おもちゃ絵）の中にあつた色々な髪を着せ替えのようにかぶせて遊ぶ（髪合わせ）を踏襲した図柄には、近世的な意匠の取り込みがみられる。と同時に、多彩な女性作家の作品の中から自分の嗜好に合うものを見つけて下さいという読者へのメッセージも読み取れる。また裏表紙には、金港堂の主人原亮三郎のイニシャル R・E を赤字で装飾文字にデザインして刷り込まれている。

次に収録作品の内容にふれると、まず巻頭を飾る「女記者」は、「日本絵入新聞社の編輯局」で「横字新聞中の珍しき雑報及緊要なる電報を翻訳し兼ては小説の著作をなす一個の女記者」を主人公とした小説である。安永琴は「浮薄

艶淫なるには筆を染めざる覚悟決心」をし、「艶聞」記事を依頼されても断固拒否し、「他の女流作者の如く強て下流社会、男性の内幕などを書き穿ちて特意然たる如き風」のない高潔な女性記者として描かれている。末尾は、「安永松琴女史」が、「英国に航し勉学の傍普く絵入新聞視察中の処、此程帰朝」した同社の探訪員「野本高友氏」と結婚し、「新郎新婦相携へ太平新聞なるを発行」するという新聞報道で締め括られている。女性新聞記者の出現は、明治二三年二月一日『国民新聞』創刊の際に、竹越三又夫人の竹代が編集員として入社したのが最初といわれるが、同時期には、女性記者を主人公とした弦斎居士の「新聞記者」（『報知叢話』一〇号、明二四・四・五〇六・二八）がある。

すみれ女史の「半開の梅」は、主人公の女学生艶と幼なじみの直江との間柄が恋に発展していく経緯を描いた物語である。直江の「洋行」が決まり、別れの辛さに涙する二人は「一処に行つて十分勉強」といふ父親に願い出、許可を得て渡英。末尾は、大学を卒業し結婚適齢期を迎えた二人が、「共に着錦の誉れを荷ひ、去る十八日英国発の我が汽船富士号に投じ、帰朝の途に就かれたり」と報ずる新聞記事の引用で締め括られる。同様に藍江女史「うたゝね」も、「洋行」によつて引き裂かれる幼馴染みの恋を描いた作品である。女性主人公川崎富子と山田康正とは許婚同士であるが、山田の「伯林」留学が決まり、悲嘆にくれる富子は辛い体験をもとに「淑女が筆のすさび」に「人情小説」

を書く。末尾は、お富が「追ひ縋」つて「駆出る途端」、山田を乗せて「挽出す車、涙に霞みて影見えず」というように別れの愁嘆場が閉じられる。竹柏園女史「胸のおもひ」と秋月女史「許嫁の縁」の二作品は、先にも触れた通り、前者は「英学」に堪能で「西洋風の交際」に長けた「活発」な種子と和歌の素養を身に付けた「温良」な露子という対照的な女性の間で揺れ動く男性主人公の「胸のおもひ」を、後者は女学校で西洋流の教育を受けた主人公が、「圧制結婚」と「自由結婚」との間で葛藤する姿を描いた恋愛小説である。いずれも、小説の結末が幸福な結婚で締め括られるという点で共通している。最後に、椰園女史「孝子の一心」は、「孝心」をテーマにした時代物である。主人公の一二歳の少年一明丸が、「鶴ヶ丘八幡宮の社前」で「頼朝卿」の命で「召捕られ」た「父様の命を助けた」と一心に祈ったところ、その「孝心神人感に堪ふる所」となつて父は免罪となり、親子が再会する話である。

無論、個々の作品に過大な同一性を負わせて一括りにすることは避けねばならないが、こうしてみると時代物の「孝子の一心」を例外として収録作品の殆どが恋愛小説であり、しかも六作品中四作品が才子佳人の結婚で大団円という共通項が浮かび上がる。また『閨秀六家撰』出版後、『都の花』（九一〜九四号、明二五・九・一八〜二一・六）に掲載された坪井秋香の「二人佳人」も、結婚式で大団円を迎える恋愛小説という点で、先行の女性作家作品と共通する。

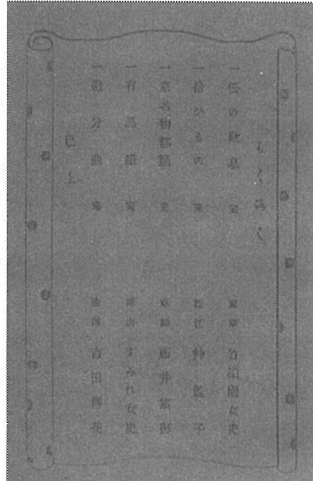
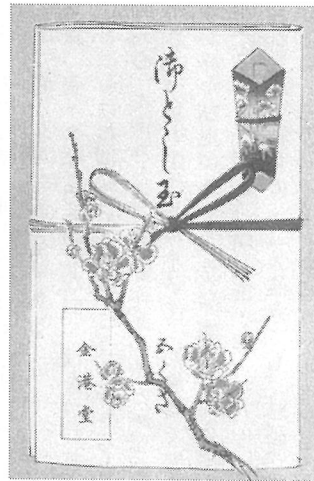
この作品は女主人公露野と春枝を「両美人」として設定し、父の実家断絶に際して相続人となり養子を迎える必要に迫られた露野は相愛の春日清との結婚を断念し、友人の春枝に譲るという物語で、末尾は「二対」の男女が揃って「目出度結婚の式を挙げ」たという新聞記事の引用で締め括られる。

このように、『都の花』誌上に掲載された女性作家作品の多くが、当時の批評言説にみられるところの「才子佳人的の恋情小説」（流芳浪人「明治廿五年の文学界」（明二五・二『女学雑誌』三〇二号）の常套的パターンを出ていなかったことは否定できそうもない。しかし、それ以上に注目したいのは、すでにこの時期女性作家の小説は、出版社の企画、宣伝で売り出される（商品）として流通し始めていたということである。

四 新年号付録に掲載された〈閨秀小説〉

先に触れたように、『都の花』では女性作家を起用した企画がみられるが、注目されるのは、新年特別企画として女性作家作品を付録欄に登場させているということである。

明治二四年一月二〇発行の『都の花』七三号の巻頭には、赤の色紙に「都の花第七拾四号第七拾五号に就き」という見出しで、次のような明治二五年一月三日発行の『都の花』七四号の宣伝広告が掲載されている。



【図2】

御年玉として○竹柏園女史、葦花女史、藤井紫影、吉田僊花等の短編読切ものゝ愛たきもの哀れるもの五つ種を相添へ中也ゆかしき表紙を作りて御賞翫に供へ……。（傍線筆者）

右の宣伝文にみられるように、『都の花』は編集營業方針として、新年号付録に女性作家の筆になる二作品を登場させることをセールスポイントとした紙面作りをしている。予告通り新年号の巻末には付録として、色刷りの中扉を付け、赤の色紙を使うという意匠を凝らし、『女史』の署名を冠した二作品、すなわち竹柏園女史「松の嘆息」とすみれ女史「有馬筆」を含めた五篇の「短編読切もの」を掲載している。【図2】にみられるように、赤地の中扉に紅梅の絵をあしらった華やかな祝儀袋がデザインされ、紅白の「蝶結び」の水引きの上には「御とし玉」、水引の下には「玉くさ」と書かれ、左下には贈り主の「金港堂」という名が刷り込まれている。また次頁には赤の色紙に「もくろく」と書かれ、五作品の題名及び雅号が刷られている。

筆頭を飾った竹柏園女史の「松の嘆息」は、「旧日本で愛された桜」や中国の「牡丹」と「西洋風」の「薔薇」が、「花の優劣」を議論する様子を描いた会話体中心の寓意小説である。結末は、「互に己こそ」は「花王」と主張する議論を聞いた「老松」が「口なしの花に生れ」たいと「嘆息」するという設定であるが、欧化主義への反動として、国粹主義思想が台頭する中で東西思想の優劣をめぐる議論が紛糾する時代状況を、新年号にふさわしい華麗な花に仮託して諷刺した作品である。もう一つの女性の筆になる小説「有馬筆」は、主人公の娘松下園が、中学生の三樹を見初め、「女よりつけ文する」という「大それた仕方」で「初恋の切な

さ」を打ち明けるが、断り状を受け取り恋に破れて入水する。しかし、実は二人は相愛で、死に迫りやった手紙は、三樹と同じ下宿生の奸計だったという悲劇的恋愛小説である。

明治二十二年一月から始まった『国民之友』の新年夏期の文芸付録号の形式は、文壇の注目を集め他の雑誌の模倣するところとなったといわれる⁽¹⁰⁾。その付録欄に女性作家作品が掲載されたのは、明治二十五年八月一三日刊行の夏期付録号に登場した若松賤子の「雛嫁」が最初である。尚、婦人雑誌では、明治二十三年一月一日発行『女学雑誌』一四号に、花園女史の「芦の一ふし」と並んで若松賤子の「忘れ形見」が掲載され、また明治二十四年一月一日発行『女学雑誌』二四六号にはつゆ子作「こわれ指輪」が新年付録として採用された先例がある。しかし、当代の大家が誌面を彩る一流文芸雑誌の『都の花』が、女性作家の新年附録への起用に踏み切ったという現象は軽視できない。

五 一葉の登場——小説の発表形態をめぐる

まだ無名に近かった一葉が、作家として文壇に進出するきっかけとなったのは、花園の紹介によって『都の花』に二編の小説を発表したことであることは、周知の通りである。ここでは特に、一葉の作品が誌面に登場した際の発表形態に注目してみたい。

『都の花』では、明治二十四年一月一日発行の七〇号に創刊三週年の節目を記念して、「すっかり出し物を相改め」という誌面一新の予告を載せて以降、「表紙の代わり目、号数の句切り目」に掲げる新作小説の予告記事を掲載している。そして創刊四週年を迎えた明治三十五年一月六日、『都の花』第九四号には、樋口一葉女史「うもれ木」の予告が載った。次いで同月二〇日発行の第九五号の巻頭に掲げた口上「都の花四週年の祝ひ」では、「都の花は、出版以来日本随一の小説とおだて下され、おひくゝ号数相重り、もはや百号にも近づきたる上、先月二十一日が満四年めの誕生日ゆえ、此の九十五号に於いて身祝ひいたし」と述べ、一葉の「うもれ木」(九五〇九七号、明二五・一一・二〇〇二・一八)を「名人の新作」として宣伝し、三宅たつ子の序文を付けて華々しく登場させている。「うもれ木」は、時代の波に逆らい赤貧に甘んじていた陶画工が慈善事業家の策略に巻き込まれて破滅してゆく姿を描いたものであるが、露伴の「風流仙」や鴎外訳「埋木」等の影響が指摘されている。後年田山花袋は『東京の三十年』(博文館、大正六年)の中で、『都の花』編集者の藤本藤蔭が「女にしては男のような文を書く人だ」と「一葉を評した」と述べているが、そのことは女性の書き物に対する編集者の規範意識を示している。

この時期編集者藤本藤蔭は、一葉を世に送り出すために意欲的な姿勢で臨んでいる。一葉の日記によれば、明治二

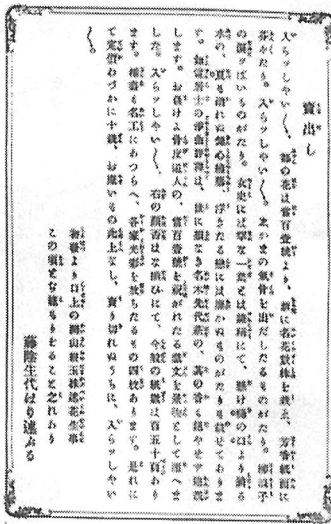
五年一月二二日の藤本宅訪問が初対面で、その際に『都の花』新年号付録として田辺花園と一葉、そして坪井秋香或いは佐々木竹柏園の三人の女性作家特集を組むという「松竹梅三幅対」の企画を聞き、原稿を依頼される。この件につき、一葉が訪問した際に、花園は「新年の付らくといふさへ花々しきを女斗三人などいさゝか目たつふしなきにもあらず」(明二五・一一・一一「道しはのつゆ」というように、拒否反応を示している。結局、新年特別企画としての女性作家特集は実現しなかった。しかし、編集者の依頼に応じて脱稿された「暁月夜」は、翌年二月一九日発行の『都の花』一〇一号に、予想外に華々しい演出で登場したのである。

明治二六年二月一日発行の『都の花』第一〇〇号には、「都の花第百号二月十九日発行に付き」と題する予告が載り、百号祝賀記念の新企画として一〇一号から誌面構成を改革し、収録作品は「凡五種と定め小篇のものは三四号にて終はらしめ長篇のものと雖も拾号よりは超出せざらんやうにし則ち第百号より第百拾号を以て大概は終はらしめ毎拾号に面目を新にす」という機軸を打ち出している。そして「百号号より新に薰香を発する」新作小説の一つとして、「一葉女史の短篇読切もの」掲載の予告をしている。

明治二六年二月一九日発行の一〇一号の巻頭には、編集者藤本藤蔭の筆になる「売出し」文が掲げられているが、これは同誌上前例のない試みであった。一葉は、この雑誌

を受け取った際の印象について、「表紙は薄紫の紙に桃櫻の面様も中々によし 我か暁月夜これにのせて永洗かさし画花々しく藤蔭ぬしが口上に我か上ことく敷かれたるも面ほてりする業なり」(明二六・二・二二「よもきふ日記」)と書き留めている。【図3】にみられるように、編集者は「都の花は当百壺号より、新に名花数株を栽え、芳香紙面に芬々たり」という一文のあとで、「女史には罕な一葉とは謙称にて、懸け樋の口より滴る水の、夏も洩れぬ錦心繡腸、浮きたる恋には靡かぬものがたりも載せてあります」というように、女性らしい奥ゆかしさを強調した売り出し文句を述べている。

【図3】



「暁月夜」の女主人公の香月一重は、「慈善会」や「園遊会」など上流社会の社交の場に近づかず、結婚を厭う女性として設定されている。美しい子爵令嬢の「一生ひとり住みの願ひ」の噂を耳にした文学書生の森野敏は、偶然拾った一重の手巾に書かれた西行の歌を見て、「深き子細ありて尋常ならぬ思ひを振袖に包む人なるべし」と好奇心を募らせ、庭男に身を窺して接近し、謎を解き明かそうとする。敏は、一重が継母に虐待されていると勝手に想像し、救い出そうと「艶書」を綴る。一重は、敏の恋情が「身にしみ」て心乱すが、「世に引かるゝ心」を断つべく、「鎌倉ごもり」を決意する。出立の前夜、一重は「懺悔物がたり」の形で、自分が子爵の妹花と下男六三の「淫奔」の果てに「宿りし胤」という「素性」を明かし、「恋は浅ましきもの」だと語る。

この作品の妙味は、秘密を抱える厭世的な女性の謎を解き明かそうと文学書生が織りなす想像の物語と、懺悔物語によって明かされた真相の落差にあり、読者の想像力を刺激し謎解きへと誘導する様々な技巧が駆使されている。しかし、興味深いのは、編集者は、「暁月夜」を「浮きたる恋には靡かぬものがたり」というキャッチフレーズと共に、読者に提供していることである。

こうした文句が宣伝効果をもつには、一体どのような背景があったのだろうか。ここで想起されるのは、内田魯庵が、明治二八年一二月に刊行された『文芸倶楽部』臨時増

刊「閨秀小説」を評した際、「硯友社の諸才子が感^(感)んにもてはやされし頃、一方に其等諸才子が作千篇一律にして佳人才子の恋愛談を材とするを笑ふものありき」と述べていることである。また魯庵は、「女流が恋愛を説くに当りては男子よりも更に十層倍の戒慎を要するは女徳の一端」であるとして、「軽浮なる恋の物語を作るは男子に比較して更に見苦し」と批判している⁽¹²⁾。つまり、先の編集者の宣伝文句には、ありふれた浮薄な恋愛小説とは異質な点を強調して、読者の興味を喚起する意図があつたと考えられる。

「暁月夜」脱稿後、一葉は度々編集者藤蔭を訪ね、「今後の著作につきてはし物かたる」(明二六・一・二二)「よもきふにつ記」というように、執筆の相談をしている。注目すべきは、一葉が日記の中で「金港堂よりの注文に歌よむ人の優美なるを出し給へといふこそはいとくるし」(明二六・二・九「よもきふにつ記」)と記していることである。歌詠みの「社会にたち交りてあまましきいとほしきことを見聞き」した一葉は、「誠のみやひ」なる「歌よむ人」を描くことの困難さに直面し、編集者の要請に応えられずに葛藤している。一葉は再び藤蔭を訪問した際にも、「歌の入たる小説出来給は、得させ給へ」(四・一五「しのぶくさ」)と原稿依頼を受けており、和歌や王朝文学の素養を身に付けた女性作家一葉に、「優美なる」文章を期待するメディア側の要請があつたことを窺わせる。

以上のように作品掲載時の形態に注目すると、『都の花』

の編集者は一葉の作品を、四週年記念や一〇〇号祝賀記念といった雑誌創刊以後の節目にあたる場に華やかな演出で登場させ、有望なる新進女性作家として売り出そうと企図していたことが見て取れる。その一方、「暁月夜」掲載後わずか四ヶ月足らずで、明治二六年六月に『都の花』は一〇九号をもつて廃刊となつたことを考慮すれば、すでに売れ行きの減少という苦境に陥つていたことが推察される。だとすれば、一葉の起用は、そうした危機に対処すべく打ち出された打開策の一つでもあつたと考えられよう。

結びにかえて

『都の花』廃刊から約一年半後、明治二八年一月に博文館から『文芸倶楽部』が刊行される。編集者大橋乙羽は、硯友社の作家として『都の花』の寄稿者でもあつた。『文芸倶楽部』は、「女性作家という存在に門戸を開いた」⁽¹³⁾雑誌として注目され、とりわけ明治二八年一二月に刊行された『文芸倶楽部』臨時増刊「閨秀小説」特集は、巻頭に掲載された肖像写真と相俟つて「閨秀」という存在への関心を一気に煽るきっかけとなった現象として様々に議論されている⁽¹⁴⁾。本稿では、その『文芸倶楽部』に先駆けて、明治二〇年代前半期に『都の花』が女性作家の開拓という方面で果たした役割に注目し、同時期の他の小説中心の文学雑誌と具体的に比較した上で、画期的な革新性を持つもの

であつたことを検証した。『都の花』から『文芸倶楽部』への展開については、今後稿を改めて追跡してゆきたい。

注

(1) 平田由美『女性表現の明治史―樋口一葉以前―』(岩波書店、一九九九年一月)は、「メディアは女性の読み書きを拡大すると同時に、そうした性差の秩序に従わせようとする言説が繰り返し現れる場でもあった」と指摘し、新聞・雑誌に出現した「女性の書き物」及びそれらを取り巻く言説について膨大な資料を駆使して分析し、メディア勃興期の女性表現の形成過程を論じている。尚卷末には、「女性文学関係年表」(一八八四―一八九一)が付されている。

(2) 近代女性文化史研究会編『婦人雑誌の夜明け』(大空社、一九八九年九月)所収の三鬼浩子「明治の婦人雑誌をたどる」には、「一八八八(明治二一)年における婦人雑誌発行概況」の一覽表が掲げられている。その他三鬼浩子『近代婦人雑誌関係年表』(大空社、一九八六年一月)参照。

(3) 高田知波「雅号・ローマンス・自称詞―『婦女の鑑』のジエンダー戦略―」(『日本近代文学』第五五集、一九九六年一月)は、「男性のライターが女性作家を装って小説を発表するという事例」の「最も早いケースの一つ」として、明治二一年一月八日から二二日にかけて『読売新聞』に「蘆屋よし女」という署名で発表された『夜の錦』を挙げている。

(4) 岡保生『「やまと錦」解説』(近代文芸雑誌複複製叢書『やま

と錦』別冊、臨川書店、一九九八年二月)参照。

(5) 『以良都女』では、明治二二年六月一日発行第二四号に三周年祝賀企画として小説の投稿を呼びかける社告を掲載し、二八号(明二二・一〇・二三)から毛布野女史作「心づくし」の連載を開始している。しかし同誌上女流小説は意外に少なく、毛布野女史「心づくし」(同誌二八・四一―号、明二二・一〇・二三―二・八)、小蓮女史「懸賞小説」(六八・七一・七五号、明二三・九・五―二・五) 神田一女生「無名小説」(一一・六)(七八・八四号、明二四・二・五―六・二三)、小星史女「葉さくら」(読切小説)(八三号、明二四・五・二〇)の四篇を数えるのみである。

(6) 露伴「日くらし物語」(明二三・四・八―二九『読売新聞』)では、女性ゆえに痛烈な批判を免れる女性作家が描かれている。主人公の作家「露伴」は「小説博聞会」に参加するが、会の趣旨は「各自一篇の文章を懷中し来り順次に読上し後互に品評」をし、「おもしろからずとの伴を得たるもの」は「懺悔文を作り」「竹鞭にて背中を三度どや」されるというのであった。その結果、「衆評一致にて緒蓮女史ゆかり式部は罰を加ゆるほどにもあらずと定まり」、男性作者は「嚴數評」され、「露伴」は「最も強く罰すべし」という判定が下される。「露伴」は「女作者」も罰すべしと抗議するが、座中では「女の方を持」つ者が多く、「我ばかり懺悔文を作る」という結末になる。

(7) 天理大学付属天理参考館編『おもちゃ絵の世界』(天理大学出版部、一九九九年三月)参照。

(8) 竹柏園女史は「姉妹」という題で、孤児となった姉妹の絆を一人称「妾」の回想形式で綴った言文一致体小説を、『都の花』一九号(明二二・七・二二)に発表している。この他、花圃女史「こぞのつみ」(『都の花』八八号、明二五・八・七)も、一人称回想形式の小説である。これは、一人称の語り手「我」が、大邸宅の令嬢を「我が境界」と比べて羨むが、その邸宅が「金持の所有に期し売家となれる」のをみて、「人はたれもうちにもの思ひあらさるなしてふ事悟り」、「我分限を天の給物と安んずるようになる」という教訓物語である。

(9) 前掲書(1)の中に、「多くの『女流小説』においては『ゴールとしての結婚』がプロットの終端を形成」しているのが通例であったが、それは『才子佳人小説』と呼ばれる作のほとんどすべてに共通する特徴である」という指摘がある。

(10) 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』所収「明治期『太陽』の受容構造」(日本エディタースクール出版部、一九九七年七月)参照。

(11) 拙稿「樋口一葉『暁月夜』の技法―古典文芸復興の機運のなかで―」(『解釈』第四八巻三・四号、二〇〇二年四月)。

(12) 『閨秀小説』を評す(明二九・一・三〇・一八『毎日新聞』引用は『内田魯庵全集』第一巻、ゆまに書房、一九八四年一月に拠る)。

(13) 関礼子『姉の力 樋口一葉』(ちくまライブラリー九四、一九九三年一月)。

(14) 関礼子『樋口一葉をよむ』(岩波ブックレット、一九九二年六月)の中には、「閨秀小説」特集の出版は、「二十年代のメディアのなかではじめて『閨秀』(女流)という存在が、市場化されたこと」を意味するという指摘がみられる。小川昌子『一葉女史』誕生―博聞館発行『文芸倶楽部』をめぐる―(『国語国文研究』第一一二号、一九九九年七月)は、「閨秀小説」特集号を『女流』というジャンルを産み出した一つの契機として捉え、ジャーナリズムの中で『女流作家』について語る磁場が形成される過程を考察している。また菅聡子「流通する『閨秀作家』―明治20年代の場合」(『国文学』一九九九年一〇月号)は、「近代的出版社の商業戦略」によって『文芸倶楽部』に出現した「閨秀作家」が、「商品」として流通してゆくプロセスを検討している。

(やぎみずほ／三重大学非常勤講師)